立教大学学術推進特別重点資金（立教ＳＦＲ）
大学院生研究
２０１２年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院　現代心理学　研究科　映像身体学　専攻		
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏　名	
	現代心理学研究科・映像身体学専攻・博士後期課程２年	河野　真理江　印	
指導教員	所属・職名	氏　名	
	現代心理学部映像身体学科・教授	中村　秀之　印	
自然・人文・社会の別	自然　・　[人文]　・　社会	**個人・共同の別**	[個人]　・　共同　名
研究課題名	1950～60年代の日本映画におけるメロドラマのサブ・ジャンルに関する研究		
研究組織	在籍研究科・専攻・学年	氏　名	
	現代心理学研究科・映像身体学専攻・博士後期課程２年	河野　真理江	
研究期間	2012　年度		
研究経費	200千円（実績額又は執行額）		

研究の概要（200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。）

本研究は、映画ジャンル研究、映画史研究を基本的立場としつつ、女性映画研究、受容理論、大衆文化論といった視点から、50年代から60年代にかけての日本映画におけるメロドラマの展開を多角的に検証する試みである。本研究では、30年代に日本映画として最初に「メロドラマ」と呼ばれて産業的に確立したフィルム群を念頭に置きながら、50年代以降の「文芸メロドラマ」、「すれ違い映画」、「リバイバルもの」等の従来ほとんど注目されてこなかった同時代のサブジャンルを対象として、これらのフィルム群の形式的・美学的特徴について議論することを目的とした。とくに「文芸メロドラマ」にかんして充実した成果をあげることができた。今後は、本研究で得られた知見に基づきながら、実証的アプローチと理論的アプローチのバランスがとれた複合的な視野を維持し、日本映画史をメロドラマという尺度を通じて読み直すことを目指す。

キーワード（研究内容をよく表しているものを３項目以内で記入。）

〔　日本映画　〕〔　メロドラマ　〕〔　ジャンル研究　〕

研究成果の概要（図･グラフ等は使用しないこと。）

本研究の最も大きな成果のひとつは、【文芸メロドラマの研究】にかんするものである。この研究は、①ジャンルの概要と歴史的位置の考察、②映画『猟銃』のケース・スタディ、から成る。この研究の最大の意義は、「文芸メロドラマ」という、これまでほとんど学術的関心を向けられることのなかった日本映画の同時代的なメロドラマのサブジャンルに目を向け、ジャンル論、女性映画研究の立場から、その歴史的、産業的、形式的な諸特徴をごく一般的なレベルから例外的な事例にいたるまで検証したことにある。①、②で得られた知見は、それぞれ第 38 回日本映像学会大会と立教大学大学院映像身体学専攻主催研究会で口頭発表を行ったのち、論文にまとめられた。①は『立教映像身体学研究』第１号（2013）に掲載された。②は学会機関誌に投稿し、現在査読中である。また、本研究を通じて【日本映画におけるメロドラマ・ジャンルとその歴史的概念】について、国内外の先行研究、とりわけ 1970 年代以降の英語圏におけるファミリー・メロドラマの研究を精査しつつ整理する機会を持った。この成果についてはまず 2013 年６月に第 39 回日本映像学会で口頭発表したのち論文にまとめる予定である。以下、【文芸メロドラマの研究】①、②、【日本映画における「メロドラマ」の歴史的概念】について、それぞれ「研究の目的と方法」、「研究成果」、「先行研究との関係」を記載する。

【文芸メロドラマの研究】

① ジャンルの概要と歴史的位置

・研究の目的と方法　本研究の目的は、1950 年代から 60 年代に流行し、女性観客を中心に大衆的な人気を集めた、いわゆる「姦通小説」の映画化作品群を網羅的に調査することであった。これらの映画は当時、しばしば「文芸メロドラマ」と呼ばれていた。本稿は、同時代的な観点から国産のメロドラマ映画を把握する必要があると考える立場から、このいわゆる文芸メロドラマの映画史的位置を明らかにするために、そのジャンル的特徴を三つのアプローチを通じて検証を行った。第一に、ジャンルの形成から衰退にいたるまでの約十年間の歴史的コンテクストを記述した。第二に、このジャンルが成人女性向けの商品としての市場を確立する過程を、松竹を事例に取りあげて考察した。第三に、当時の批評を精査し、テクストとの関係からこのジャンルが同時代にどのように受容されていたかを分析した。

・研究成果

本研究の三つのアプローチを通じて、次の事柄がそれぞれ明らかになった。第一に、文芸メロドラマ映画は、女性主人公の性的な葛藤を題材とした作品が多く、成人向けの女性映画として確立した。とくに1957年頃から起こった「よろめきブーム」は、ジャンルの隆盛に大きな影響を及ぼし、『挽歌』（1957）、『日日の背信』（1958）などの作品を大ヒットさせた。第二に、松竹における文芸メロドラマの商品化の過程には、松竹が主力商品として同時代に手掛けていた他のメロドラマ映画と比べ例外的な特徴がみとめられた。たとえば、松竹が文芸メロドラマを本格的に手掛けるきっかけとなった作品『挽歌』（1957）は、傍系プロダクションである歌舞伎座プロで製作され、五所平之助という非専属監督によって手掛けられた。にもかかわらず、1960年前後に文芸メロドラマは松竹女性映画のなかで最も人気のあるコンテンツに成長したのである。第三に、文芸メロドラマ映画のテクストに内在化された女性映画的特質は、男性批評家との間にしばしば葛藤を引き起こした。当時、男性批評家たちの多くが、文芸メロドラマの女性主人公を道徳的に非難した。『妻は告白する』（1961年、増村保造）に対する男性観客の例外的な賞賛には、女性映画という枠組みのなかで男性的な視線を貫いた増村への共感が窺われた。この作品への賞賛と文芸メロドラマ一般へ蔑視はいわば表裏一体の関係にあり、現在に至るまでの文芸メロドラマというジャンルへの低い関心と、増村保造の傑作としての（女性映画としてではなく）『妻は告白する』の高い評価という二極化した状況に、直接的な影響を及ぼしていると考えられた。

・先行研究との関係

本研究ととくに重要な関係を持った先行研究として、⑴菅聡子「「よろめき」と女性読者――丹羽文雄・舟橋聖一・井上靖の中間小説をめぐって」（『文学』3・4 月号、54-68 頁）と⑵斉藤綾子「女優は抵抗する」（四方田犬彦・斉藤綾子編『女優 若尾文子』みすず書房、111-224 頁）がある。⑴は、「姦通小説」の爆発的流行とそのメディア横断的展開（映画も含む）と要約できるいわゆる「よろめきブーム」の支持基盤が女性であったことを指摘した点で重要な論文であり、本研究の着想に影響を与えた。⑵は、今日ごく一般に最も男性的な監督だとされている増村保造の映画でしばしばヒロイン役をつとめたスター若尾文子の身体性が、女性観客と親密な関係性を結ぶ可能性について論じている。⑵の著者自身はこの映画を必ずしも女性映画とは位置づけていないものの、この視点は、本研究が増村の『妻は告白する』を女性向けの文芸メロドラマとして理解するに際し、具体的な手懸りとなった。

研究成果の概要　つづき

② 映画『猟銃』のケース・スタディ

・研究目的と方法

映画『猟銃』（1961 年、五所平之助）は、原作者、物語の題材や構造、技術と形式、批評的受容をめぐって、文芸メロドラマとして単に一般的/典型的な特徴がみとめられるというばかりでなく、ある明確な例外性/特権性を持つと作品だと考えることができる。とくにこの映画における主題と技術、そして双方の著しい統一には、今日的な意味でのメロドラマ的特質がみとめられる。そこで本研究では、日本映画固有のメロドラマのサブジャンル（文芸メロドラマ）を、70 年代半ば以降の英語圏でのメロドラマ研究の蓄積を踏まえて理解するにあたり、『猟銃』が範例的な役割を果たすという立場から、この作品のテクストを徹底的に分析し、そのメロドラマ的特質からこの映画を、地域言語的で同時代的な意味でのメロドラマ（文芸メロドラマ）として理解しつつ、同時に、より地球規模的で現代的な意味でのメロドラマを再ジャンル化する手懸りとすることを試みた。

・研究成果

映画『猟銃』には、その主題（女性主人公、不倫の恋、夫婦間の性的問題）や技術（ワイドスクリーン、カラー、ディープ・フォーカス等の撮影技法、豪華で華美な舞台セット、思わせぶりで大げさな音楽）に、50 年代ハリウッド・ファミリー・メロドラマとの顕著な類似性がみとめられた。しかし、ファミリー・メロドラマの概念は 70 年代以降のフィルム・スタディーズが構築したと考えられていることからすると、『猟銃』が同時代的かつ地域的な用法でも（文芸）メロドラマと理解できることは興味深い事実である。この一種の時代倒錯が示唆しているのは、メロドラマの意味と用法が、必ずしも不可逆な時間の上で一定に変化してきたのではないということであり、ローカルな、あるいは過去の「メロドラマ」の意味と用法を探求しつづけることには、単に考古学的な価値だけでなく、より豊かで実際的なメロドラマ概念の構築を目指す上で意義があると考えられた。

・先行研究との関係

文芸メロドラマとしての『猟銃』の範例的特質を理論化するにあたり、ジョルジュ・アガンベンが『事物のしるし』（2011 年）のなかで整理したパラダイムの概念を念頭に置いた。『猟銃』のメロドラマ的特質を論証するうえで、メロドラマの美学的側面を明晰かつ的確にとらえたトマス・エルセサーのメロドラマ研究における記念碑的な論文「響きと怒りの物語」（『〈新〉映画理論集成１』所収、1998 年）を参照した。とはいえ、『猟銃』の形式的・美学的特質は、当然ながらファミリー・メロドラマの特徴と完璧に一致するわけではない。そうした特権的な要素については、たとえばディープ・フォーカス技術と映画の主題との関わりについて、ジル・ドゥルーズの『シネマ*２』（2006 年）から「画面の深さ」という概念を援用した。そのほか、「メロドラマ」の意味と用法にかんして、日本映画における歴史的な概念と、フィルム・スタディーズにおける概念を接続させる方法について考えをまとめる際、木下千花の論文「メロドラマの再帰――マキノ正博『婦系図』（一九四二年）と観客の可能性」（藤木秀朗編『観客へのアプローチ』所収、2011 年）から示唆を受けた。

【日本映画における「メロドラマ」の歴史的概念】

・研究目的とその方法

申請時の段階では想定していなかったことだが、文芸メロドラマの研究が一通り完成した段階で、別のサブジャンルの研究に着手する前に、日本における「メロドラマ」の概念を歴史的に整理する必要が生じてきた。本研究は、30 年代から 60 年代の日本映画における「メロドラマ」の概念を同時代的な意味と用法に即しつつ理解したうえで、今日のメロドラマ研究の知見に照らし合わせ歴史的に位置づけなおすことを目的とする。フィルム・スタディーズが構築した理論と日本における地域的・文化的コンテクストとを結びつけ、ジャンル研究の立場から理論化する。

・研究成果

具体的な成果発表は 2013 年度に繰り越されるので、本報告書での記述は省略する。

・先行研究との関係

近年、この問題には斉藤綾子（「失われたファルスを求めて――木下惠介の「涙の三部作」再考」『映画の政治学』所収、2003 年）、ミツヨ・ワダ・マルシアーノ（『ニッポン・モダン』、2008 年）、木下千花（前掲、2011 年）御園生涼子（『映画と国民国家――1930 年代松竹メロドラマ映画』、2012 年）らがそれぞれ独自の視点から関心を示している。そのなかでの本研究の独創性は、女性映画、形式と主題の関係という二点を重点的に扱うことにある。

研究発表（研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。）

①雑誌論文（著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ）
②図書（著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数）
③シンポジウム・公開講演会等の開催（会名、開催日、開催場所）
④その他（学会発表、研究報告書の印刷等）

① 雑誌論文

・河野真理江「文芸メロドラマの映画史的位置――「よろめき」の系譜、商品化、批評的受容」『立教映像身体学研究』第１号、2013年、p.22-44

② 図書（0件）

（なし）

③ シンポジウム・公開講演会等の開催（1件）

・河野真理江「五所平之助の「井上靖・愛の三部作」―― 文芸メロドラマにおけるカラー・ワイドスクリーンの美学」、立教大学大学院映像身体学専攻主催公開研究会「映画／文学 ―― 高度経済成長期の主流と前衛」、2012年5月19日、立教大学新座キャンパス

④ その他（1件）

・河野真理江、「文芸メロドラマと五所イズムの転換――「井上靖・愛の三部作」（1960-1961）とカラー・ワイドスクリーンの美学」、日本映像学会第38回全国大会、2012年6月3日、九州大学大橋キャンパス